OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	早離・速離（観音・勢至）の菩薩行 : 初期本地物を考えるために
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 63-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70909
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

早離・速離（観音・勢至）の菩薩行

――初期本地物を考えるために――

箕浦尚美

はじめに

室町時代を中心とした短編物語のお伽草子のうち、「本地物」と呼ばれる作品群は、一般に、「主人公は神仏の申し子であるなど異常な形で人間界に生まれ、さまざまな憂悲苦悩を体験し、その憂悲苦悩から人間を救済するため、神仏の加護を得て自らも神仏に転生する」と定義される（徳田和夫氏編『お伽草子事典』（東京堂出版、二〇〇二年）「本地物」の項・大島由紀夫氏）。その論理を『神道集』は、

> 仏菩薩ノ応迹示現ノ神道ハ、必、縁ヨリ起コル事ナレハ、諸仏菩薩ノ我国ニ遊ヒ下ニハ、必ス人ノ胎ヲ借リテ衆生ノ身ト成リツヽ、身ニ苦悩ヲ受テ、善悪ヲ試テ後、神明身ト成テ、悪世ノ衆生ヲ利益下フ御事也。（巻六第三十四「上野国児持山之事」[1]）

というように本地垂迹説を敷衍して説明するが、『神道集』においても神に成る要因が各話に厳密に示されている訳ではない。また、本地物には、神を対象としたものばかりではなく、仏や菩薩を対象とする作品もあり、仏典に見られる釈迦の前生譚と同類の構造としても捉えられるが、その仕組みはやはり十分には説明できない。日本古来の神話と同様だとする理解や、菅原道真のように人が神に成ることに重ねるなどの解釈もある。実際、本地物語において人が神仏と成る論理は、そうした思想が重層的に合わさって生まれたと考えるべきであろう。

登場人物が仏や菩薩に成る系統の本地物の初期の姿を考える際に、しばしば着目されるのは、『今昔物語集』巻五「東城国皇子善生人、通阿就頭女語第二十二」（以下、善生太子説話）と、観音菩薩・勢至菩薩の前生譚である早離と速離の兄弟の説話である。善生太子説話は、東城国の善生人と西城国の阿就頭女とその双子の家族の物語が、善現菩薩・大吉祥天・多聞天・持国天の前世物語として描かれたものである。偽経『大乗毘沙門功徳経』に収め

られる話であり、後に、阿弥陀如来とその家族の前世の話としてお伽草子『阿弥陀の本地』へと展開する。

『大乗毘沙門功徳経』が善生太子説話の典拠であることについては、本田義憲氏によって『覚禅抄』等にある逸文が指摘されたのを端緒とし[2]、牧野和夫氏による真福寺本『往因類聚抄』の指摘[3]、更に、七寺で経典そのものが発見されたことで一気に脚光を浴びた。その内容の紹介と研究成果は、『七寺古逸経典研究叢書』四・五（大東出版社、一九九九年、二〇〇〇年）に纏められている[4]。七寺本『大乗毘沙門功徳経』は同寺に所蔵される平安後期（一一七五―一一八〇）書写の一切経と同種の形態的特徴を持つことから、それと同時期の書写であることが明白であり、成立はそれ以前と考えられる。また、他に青蓮院蔵鎌倉中期写本が存在する。

善生太子説話は、この偽経が発見される以前から、本地物の古い姿を示すものとして注目されていた。例えば、小木喬氏「「本地物」の思想とその展開」（『鎌倉時代物語の研究』、一九六一年、東宝書房）がそれであり、これを踏まえて松本隆信氏は、

（引用者注：『今昔物語集』巻五の「大光明王為婆羅門与頭語」「転輪聖王為求法焼身語」などの釈迦の本生譚十例を引いて、）仏陀の前生の姿は、身を捨てての菩薩行や、人を善道に導く功徳行を積んだものとして語られている。すなわち、本生譚における苦難は、そのためであって、自ら求めて苦難を受けているのである。ところが、本地物の主人公達が経験する苦難は、周囲の事情によって生じてきたもので、全く受動的であり、菩薩行といった性質は全く見られない。（略）

（引用者注：『今昔物語集』巻五―二二については、「あまりに日本の本地物に近く、和製の前生説話ではなかったか」とし、）日本の本地物では、そういう世俗的な苦難が、神仏となるための条件になっている点が説明できないのである[5]。

と述べている。ここで指摘されているように、仏の前生譚に類似した構成を持つ本地物語が仏の場合とは異なる特徴の一つとして、主人公の苦難に、継子いじめや飢餓などの世俗的理由による苦難が多く描かれることが挙げられる。松本氏の論考ではこの後、中世の本地物には菩薩行が見られないとして、人が神に成った菅原道真の物語を検討するのであるが、前述のように、善生太子説話には、実際に経典が残っている。ただし、それは、インド・中国由来の経典ではなく、日本撰述の偽経であり、古来の仏の前生譚に直結するものではないと考えられる。後で述べるように、ここでの人から仏への転生には菩薩行を読み取るべきと考えるが、それは、『今昔物語集』巻五の釈迦の本生譚の例に見られる菩薩行とはやや異なる性格を持つ菩薩行である。また、早離・速離の物語を説く『観世音菩薩往生浄土本縁経』も本経と類似した点の多い日本撰述と考えられる偽経である。従って、初期の本地物を考えるために、この二経の検討がまずは必要と思われる。これらは、物語としての情趣を多分に含みつつ、仏教経典として作られている。それらは、必要があって要請されたのである。他の仏教説話

とどのように関わるのか、また、中世の本地物語へどのように変化していくのかについての考察が必要であろう。

一　早離・速離説話の概要

早離と速離の兄弟の話は、幼くして母を亡くした兄弟が継母によって孤島に置き去りにされて飢餓で命を落とす悲話が、観世音菩薩と勢至菩薩の前生譚として記されたものである。『観世音菩薩往生浄土本縁経』（以下、『観音本縁経』）に収められている。この経典も、思想や表現において『大乗毘沙門功徳経』と類似した点の多い偽経である。原型が中国・朝鮮で作成された可能性は否定できないものの、現存本については日本で平安期に作成されたと考えられる。その本文は、以下のような和製と見られる漢文体である。

夫差彼山独往（夫、彼の山を差して独り往く）。去後二七日。更不還来。時妻生異念。作是思惟。長那若住彼山不来者（長那（夫の名）、若し彼の山に住て来たらずは）。我如何養育二子。若採菓雖来（若し菓を採りて来と雖も）。彼愛念二子。我有何等分。今以方便。除遣二子。

（『新纂大日本続蔵経』一（国書刊行会、一九八〇年）。読みは、吐阿『科註浄土本縁経』（元禄二年、太和屋源兵衛刊、大谷大学蔵）を参照した。）

引用は、父親が食糧を探しに出かけている間に継母が子供の遺棄を企てる場面であるが、漢文としては、特に傍線部の語順が不適切である。本経は、中国の経録には掲載されていない。日本では、長西『浄土依憑経論章疏目録』（十三世紀）には掲載されているが、承暦元年（一〇七七）蓮永写『阿弥陀仏経論並章疏目録』（真福寺蔵、寛印（平安中期）撰か[6]）には見られず、その間の成立と考えられる。本文の引用は、興然（一一二一―一二〇三）『五十巻抄』「阿弥陀」（十二世紀末）に、「観世音菩薩往生浄土本縁経云」として、末尾にある阿弥陀如来讃嘆の偈が引用されるのが古い[7]。

早離・速離の兄弟の物語部分については、『宝物集』（十二世紀末）で求不得苦を論じた中に見られる抄録が古い。まずは、これによって、早離速離説話の概要を確認しておきたい。

こゝをもつて、観世音菩薩は、一切衆生のねがひをみて、貧窮なるものをあはれみすくはんがために、菩薩の行をばおこし給ひしなり。その因縁、をろ〳〵申侍るべし。

むかし、一人の梵士ありき。その名を長那といひき。その妻を、摩那斯羅女といふ。二人の子をもちたり。早離・速離となづく。母、摩那斯羅女、生死無常まぬかれずして、病をうけてうせぬ。長那梵士、なげきかなしむ事かぎりなしといへども、世間のならひなれば、又妻をまうけてけり。

かゝるほどに、天下に飢渇ゆきて、みな人かつへ死にければ、二人の子を継母にあづけて、檀那羅山といふ山に、一をくゐつれば七日ものほしからぬ木の実ありときゝて、とりにゆきたりけるまに、継母、早離・速離の二人の継子を船にの

せて、「海松布からん」といひて、はるかなる島にはなちけり。

早離・速離、天をあふぎ、地にふして、おめきかなしめども、とふ人もなく、あはれむものなし。つゐに食にうへ、水にうへて、死門にいる時、ちかひていはく、「我一切衆生のねがひをみて、苦をすくひ、貧窮ならんものをたすけん」とてうせぬ。願力にまかせて、早離・速離は観音・勢至の二菩薩となり、母摩那斯羅女は、子の願力をかゞみて、阿弥陀仏となりぬ。

さて、親子なるがゆへに、いまは師・弟子となりて、阿弥陀の三尊とは申なり。はなたれたりし島、今の補陀落山これ也。是かすかなる伝記にあらず、たしかの経の文なり。

（第二種七巻本『宝物集』巻三　新日本古典文学大系）

早離と速離の兄弟の母親が亡くなり、父は後妻を迎える。飢饉のために父は食糧を求めに出かけ、その間に兄弟は継母の策略によって孤島に置き去りにされる。兄弟は、飢えて死に臨み、衆生の苦しみを救うことを誓う。その誓いによって、観音菩薩と勢至菩薩となる。

「たしかの経の文」とあるが、『宝物集』の話は、前述の『観音本縁経』ではなく、逸書である『往生仏土経』に近いようである。『往生仏土経』は、天野山金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉（平安後期写か）と真福寺宝生院所蔵の真源（一〇六四―一一三六）『往生要集裏書』に、この話が抄録された際に、その典拠として記された経名であるが、これもやはり経録には確認できない経典である。二つの経典間では、特に、早離・速離の兄弟の父親に関する記述が異なっている。この点については、以前、拙稿[8]において検討したので省略する。参照されたい。

二　早離・速離の物語における孝

早離・速離の物語は、阿弥陀の三尊の由来であると同時に、親子の悲哀の物語であり、経典を離れた文学作品にもしばしば登場する[9]。そして、本話は、孝の物語としても捉えられるのだが、どの点を孝とするかという点には揺れがある。そもそも、『観音本縁経』や「往生仏土経」には、孝は明示されていない。母を亡くした幼子は継母によって孤島に置き去りにされて死ぬばかりである。早離と速離の兄弟に触れた記述のいくつかを、以下に摘記する。

1『平家物語』巻三「足摺」（日本古典文学大系）

さり共少将はなさけふかき人なれば、よき様に申事もあらんずらむと憑をかけ、その瀬に身をもなげざりける心の程こそはかなけれ。昔早離・速離が海岳山へはなたれけむかなしみも、いまこそ思ひしられけれ。

2『神道集』巻八第四十三「上野国赤城山三所明神内覚満大菩薩事」（赤木文庫本）

浄厳・浄眼ノ兄弟父妙荘厳王ヲ汲引セシ昔ノ恨ミ、早離速離カ兄弟二人紅桃浦ノ継母ノ遠流縁トシテ等覚無城（ママ）ノ大士観音

勢至ノ跡ヲ学ヒテ廻ル程ニ

3『源氏釈』（冷泉家本。『源氏物語古注集成一六』二〇〇〇年、おうふう）

（『源氏物語』宿木巻の「昔、別れを悲しびて、骨をつつみてあまたの年頸にかけてはべりける人」の注として、）これは法文也。むかし観音勢至、人のこにておはしましけるか、まゝはゝのためにころされたりければ、そのをや、かばねをくびにかけて有ける程に、ついに仏道をえたりけることなり。(10)

4袋中『琉球神道記』巻四「一、勢至菩薩事」（横山重『琉球神道記　弁蓮社袋中集』角川書店）

（「往生成仏経」の話として）父悲ミ頻ナリ。此由ヲホノ聞テ、嶋ニ尋行ニ。二子ノ死屍アリ。懇ニ是ヲ歛ルナリ。其念トホリテ、今ノ二菩薩ト成リ。梵志ハ弥陀。本妻ハ釈迦ト云。此菩薩、宝瓶ニ母骨ヲ収テ孝義ノ者ニ尚縁アリ。

5静嘉堂文庫蔵『孝行集』（慶長四年（一五九九）写本一冊）(11)

・親孝行ノ事是ハ往生浄土本縁経ノ直説也

・観音本縁経ノ中ニ発心ノ由来ヲ説様ハ（略）サテアルヘキニ非サレハ三人共ニ泣キ悲ミ死屍ヲ収メ塔婆ヲ立テ孝養ノ誠ヲ至シケリ（略）我等此島ニ在テ死ルコト偏ニ継母ニ逢ル故也（略）サレハ仏菩薩ノ縁起モカヽル悲ヲ便リトシテ菩提心ヲ発シ下フ今ノ我等モ思ヒ歎キアラハ道心ノ種子トシテ浄土ニ生スヘシ（略）

早離・速離の話は、1にあるように、飢えたまま寄り添って死んだ兄弟の「かなしみ」が人々の心を打ったと思われ、2のように、継母による遠流が「縁」となって仏になったと解釈されている。これらが基本的な解釈であったと思われるが、観音・勢至の話として、もしくは、早離・速離の話として、経典とは異なる説や解釈もある。

3の『源氏抄』には早離・速離の名はないが、観音・勢至が人の子であったときに継母に殺されたとあるので、この説話を指すと考えられる。『観音本縁経』に沿って読むならば、遺骨を頸に懸けたのは、孤島で子供達の遺骨を見つけた父を指すと思われる。父は、子供達の衣服と骨を懐き、発願し、絶食して命を終えるのであり、「あまたの年」には矛盾するが、子を思う親の愛情を捉えている。

また、孝を讃える文脈にも登場する。4では、子である勢至菩薩の宝瓶には母（釈迦）の骨が入っているという点に「孝義」をとらえ、5では、母の死後に残された父子が「死屍ヲ収メ塔婆ヲ立テ孝養ノ誠ヲ至シ」たとあり、追善供養を孝養と読んでいる。しかし、母の死は、『観音本縁経』によれば兄弟が七歳、五歳の時であり、『往生仏土経』では五歳、二歳の時である。菩提心を発すように諭した母の遺言は記されているが、残された子供達は泣くばかりで追善供養は描かれていない。また、父親は一人で子を育てることができずに後妻を迎える。もちろん、『法華経』に、「乃至童子戯聚沙為仏塔、如是諸人等皆已成仏道」（方便品）とあるように、子が戯れに行ったような供養によっても成仏は可能で

あるが、それはこの物語には書かれていない。従って、この説話においては、母の死の場面の父子の行為を仏菩薩に成る直接的な因縁と読むことはできない。実は、4や5の解釈は恐らく、後代の『阿弥陀の本地』における阿弥陀・観音・勢至の前世の親子の物語の影響を受けていると思われる。

『阿弥陀の本地』は、前述のように、『大乗毘沙門功徳経』の善生太子説話を基盤として、登場する家族の本地を、父阿弥陀如来、母薬師如来、長男観世音菩薩、次男勢至菩薩に置き換えた物語である。兄弟は母の遺骨を頸に懸けて父のもとへの旅を続けるのであり、その点を孝と読むことができる。説経『阿弥陀の本地』の末尾では、その兄弟の名前が、早離・速離であったと書かれるようになる。4の説では、父を弥陀に当てる点は『阿弥陀の本地』に共通する。勢至菩薩の宝瓶に母骨を収めるという点は、『童子教』に、「観音為師孝　宝冠頂弥陀　勢至為親孝　頭戴父母骨宝瓶納白骨」（寛永二十一年刊『実語教・童子教』（日本教科書大系　往来編　教訓））とあることと関連すると思われる。阿弥陀仏の脇侍としての観音・勢至の姿は、親に仕える孝行な子供の姿と捉えられる。後代にはこのように、阿弥陀三尊の姿と『阿弥陀の本地』の話との融合によって、孝行が強調されるようになったのであろう。

では、元来の早離速離譚は、孝とは呼べなかったのだろうか。5『孝行集』では、継母による孤島への遺棄の後、「カヽル悲ヲ便リトシテ菩提心ヲ発シ下フ」とあり、継母による迫害を含めた子の悲しみを菩提心の因縁としている。1「かなしみ」、2「継母ノ遠流縁トシテ」を見ても、二人が菩薩に成ったのは、菩提心を起こして誓願したからにほかならない。子の菩提心こそが親への孝養となる。その意味での孝は、『宝物集』に端的に示されている。

願力にまかせて、早離・速離は観音・勢至の二菩薩となり、母摩那斯羅女は、子の願力をかゞみて、阿弥陀仏となりぬ。

継母によって孤島に捨てられた子達が誓願を立てて衆生済度を誓ったおかげで、母は阿弥陀仏になったと記されている。『宝物集』には父の最期も転生も記されていないが、初期のこの物語の中心にあったのは、けなげな子供達の悲話であり、二人の衆生済度の誓願がもたらした亡母の解脱だったのではないだろうか。この物語の本来の孝はその部分にあったと言えるだろう。

なお、『観音本縁経』では、食糧を探す旅から戻った父は、子供達の死を知り、彼らを思って誓願、捨身する。その父は、五百願を誓った釈迦として描かれる。五百願は、『悲華経』に基づく釈迦信仰に依るものであるが、命を惜しまず死んでしまうという行動が注目される。

三　早離・速離の物語の菩薩行・誓願

前節で見たように、この物語の孝は、もとは亡親の救済という点にあり、兄弟が観音菩薩・勢至菩薩として顕れた要因は、孝行のためではなく飢餓で死に臨んだ時に衆生済度を誓ったからと考

えられる。

一般に、中世の本地物語では、主人公が申し子であったことや、俗世への諸仏の垂迹であることが、仏菩薩に成る理由として記される。申し子という枠組みは、必死な願いによって生まれた子であるからこそ神仏への転生を予測させるのであるが、本話においては、『観音本縁経』では、天神（天の神）の申し子として登場するものの、『宝物集』や『往生仏土経』には、兄弟が申し子によって生まれたとは書かれていない。この物語では申し子であることよりも彼らの菩薩行、衆生を済度するという誓願の方が重視されていたようである。継母による迫害と飢餓を縁とする仏の悲願を描いた兄弟の死の場面は、『観音本縁経』では、以下のように書かれている。

時憶念生母遺言。我須発無上道心。成就菩薩大悲行解脱門。先度他人。然後成仏。若為無父母者。現父母像。若為無師長者。現師長身。若為貧賤者。現富貴身。国王大臣。長者居士。宰官婆羅門。四衆八部。一切隨類。無不現之。願我常在此島。於十方国。能施安楽。変作山河大地。草木五穀。甘菓等。令受用者。早出生死。願我隨母生処。不離父生処。如是発一百願。寿終。

異文を伝える『往生仏土経』でも、菩薩行を誓って命を終えるのは同じである。幼い子の餓死に臨んでの誓願であり、それまでに彼らが他に特別なことを行ったとは本文には書かれておらず、この誓願こそが、観音・勢至に成った理由として存在している。また、『観音本縁経』には、子を失った父が悲しみのために五百願を誓って命を終えたことが記されているが、この父の死は、子供達の誓願が餓死によるものだったのに対し、自ら選んだ、より積極的な捨身と言える。

このように捨身によって解脱する方法は、『法華経』や『金光明経』などの大乗仏典において、菩薩が身を犠牲にして誓願を立てたという過去の因縁物語（Pūrvayoga）を想起させる。例えば、『法華経』の薬王菩薩が求法のために焼身するような例が著名である。「不惜身命」の求道の姿と言える。[12]

『今昔物語集』巻五には、捨身飼虎や雪山童子のように、自分の肉体を他者に施すような過酷な犠牲を伴う話が多く集められている。これらは、必ずしも『法華経』などの大乗仏典に由来するものばかりではなく、初期の本生譚（ジャータカ）も含まれるが、『今昔物語集』では、大乗仏教の捨身する菩薩のように、より激しい菩薩道として描かれている。早離速離の物語での菩薩道も、命を惜しまない過激なものである。但し、『今昔物語集』とは異なり、継子いじめによる迫害と飢餓による死の直前の誓願であり、また、父に至っては、悲しみによる誓願による捨身である。しかし、この形の捨身説話も、次に示すように、一定量存在する。

四　誓願・捨身する親子

天野山金剛寺所蔵〈佚名孝養説話集〉は、以前、拙稿[13]で紹介した十二丁の説話集断簡であるが、本稿で扱ってきた形の説話を考

えるために有益と思われる。ここには、早離・速離の物語を含む親を亡くした子供の説話ばかりが集成されている。すべての話が、仏や菩薩の前世の話として、天竺を舞台に、経典を典拠として書かれている。そして、早離・速離の物語と同様に、実際にはインド・中国由来の経典には直接的な典拠を確認できない話ばかりであり、このような話を経典に仮託した意味を問わねばならないだろう。

この本は原本ではなく抄出本の写しであり、わずかの話しか拾えないが、その構成は、見出しによって十一話を数えることができ、以下のとおりである（題名は、漢文体で書かれているが、便宜的に訓読した）。

①巻一（末尾のみ現存。本文中に、「往生仏土経」の名あり。）
②　好花女、母に遅れ、悲しみに謁する伝　第四〈吉祥天本縁、集功徳本記経説〉
③　要婆・忍婆の二人、母に遅るる伝　第七〈十二遊経説〉
④　金珠孝子、父を尋ぬる伝　第八〈釈迦縁修作破壊精舎因縁、往生仏土経説〉
⑤巻二教歎孝子、父母に遅るる伝　第一（目録のみ、本文なし）
⑥　常利孝子、□（竭カ）父母恋　第二（目録のみ、本文なし）
⑦　自然童子、母に遅るる伝　第三（目録のみ、本文なし）
⑧　花天・宝蓋、父母に遅るる伝　第四〈信順決義□（須カ）宿経説〉
⑨　長尊・長善、父母を恋ふる伝　第五〈起哭成仏経説〉（本文後半は省略されている）
⑩巻三早離・速離の二人、父を恋ふる伝　第五〈観音勢至本縁也、往生仏土経説〉
⑪　教体、父母に遅るる伝　第六〈悔罪生天経説〉

集成された話題から、編纂の目的は、父母の愛情や恩を説くことと、残された子達の父母への孝養を説くことと考えられる。いずれの話も、短いものであり、冒頭に親との死別の場面がある。そのつらさは、多くは、「悶絶躃地」と表現され、しばらくして冷静さを取り戻し、「良久蘇悟」と記される。各話は、話題や構成が類似しているばかりでなく、表現にも共通点が多い。類似した類話が、経典名を冠して、いくつも作られていたと想像される。仏や菩薩の前生譚であるから、子供達は末には仏になるのだが、幼い子にできる事柄は限られている。①から⑪の各話では、彼らは、以下のようにして、仏や菩薩となる（主人公である子とともに親も仏になる。子が親を解脱させたと理解できる。ここでは、基本的には、子の転生のみを記す）。

①自らの焼身供養で知足天へ。楽説菩薩の前世譚。②母を亡くして誓願・入水。吉祥天の前世譚。③亡母を慕い、供養の衣を作って忉利天へ。阿難と羅睺羅の前世譚。④亡き父が作った精舎を修造し、父母別離の苦を消滅させ忉利天に。釈迦の前世譚。⑧草蓋・油花の供養、誓願。父母の墓所で死のうとするが紫雲によって国王に召され譲位される。釈迦と弥

勒の前世譚。⑩（早離・速離譚）⑪父母の死を歎く声が天宮に届き、両親が地獄にいることを告げられる。供養により救済し、知足天へ。釈迦の前世譚。

ここに記された子供達が行った菩薩行には、親や仏への供養の他に、誓願を立てて死ぬという形がある。末尾しか残存しない①は、登場人物に与えられた名前などから、『法華経』の薬王菩薩の焼身を想起させるものであるが、他にも、早離・速離譚と同様に、飢えや悲しみなどによって生きられなくなって死を選ぶものがある。その形が特に現れているのは、②である。父は娘が三歳の時に亡くなっており、七歳のとき、母とともに食料を求めて出かけるが、母は、途中の大河で奪精という毒魚に飲まれて死ぬ。食料がないために母を失った娘は、菩薩行によって、財を持たない衆生に財を与えようという誓願を起こして河に身を投げる。このことが吉祥天の前生譚として記されている。[14] また、⑧は、実際には死なずに救済されて今生のうちに王と大臣になるが、親がいないつらさや悲しみによって命を絶とうとする話である。話数が限られていることから、この説話集のみでの議論は難しいが、命を絶とうとする話が複数あることは注意される。

また、前述の『大乗毘沙門功徳経』の善生太子の物語も自ら死を選ぶという点は共通している。この話では、遠い祖国に財を取りに帰ったまま戻らない善生人を妻子が訪ねていくのであるが、妻は道半ばに病で死ぬ。その後、旅を続けた子供達は父に逢う。父は賢者を請じて一日二十巻の毘盧舎那経を書写供養したあと、身命を捨てる。子供達も同様にする。後に、家族は善現菩薩、大吉祥天、多聞天、持国天に転生する。

この話に依る『今昔物語集』巻五―二二では、「サテ善生人モ其ノ所ニシテ命ヲ捨ツ。二人ノ子亦、同ジ所ニシテ命ヲ捨テケリ。」とある。青蓮院本『大乗毘沙門功徳経』も同様に単に、「命ヲ捨ツ」と書かれているのみであり、死んだ理由が不明で、彼らが菩薩や諸天に転生できる理由が明らかではない。このことを、例えば、松本隆信氏は、

善生人説話は、（略）過去の業と現在の報との関係について何も説いておらず、仏教説話としての目的も明らかに示されていない。また、善生人や阿就頭女、および二人の男子の受ける苦難も、自ら求める菩薩行のごときものではなく、阿就頭女の継母の冷遇によって起きたと述べていて、全く本地物と変るところのない内容である。[15]

と述べている。前述のように、同氏の研究よりも後に『大乗毘沙門功徳経』の存在が知られるようになったのであるが、氏が問題とされた傍線部の再検討はなされていない。ここは、次の七寺本にあるように、命を賭けた誓願による死と捉えるべきであろう。

爰に誓願を発して言く、「我は汝が為に一切の財宝を持ち来たれり。我亦た此の処に身命を捨てん。」と。而して浄賢の者を請い、一切の財宝を尽くして十方諸仏如来及び十方菩薩摩訶薩に供養す。是の如くして然る後、其の処に身命を捨つ。亦た二子等も、無上菩提を証せんが為に其の処に身命を捨つ。[16]

悲しみにより発心し誓願して身を捨てるというこの思想は、早離・速離の父親の捨身と同じである。青蓮院本や『今昔物語集』で欠落したこの箇所には、利他の救済を誓って捨身する菩薩行が記されていた。

五　菩薩行と現実

これらの物語が成立したと考えられる平安期には、菩薩行と称して実際に捨身が行われたこともあった。釈迦のように、鳩の重量分の肉を切り取ったり、目や骨髄を他者に捧げたりはしなくとも、捨身は自らが利他の誓願を立てて浄土に行くことで衆生を救うという考えに基づくものであり、説話の捨身も同様のものだったと思われる。

金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉と同じく『私聚百因縁集』などにも、仏や菩薩の前生物語として、親を亡くした子供の悲話が多く収められるが、収録される各話には、誓願や捨身への視点の濃淡が見受けられる。例えば、仏に成らずに現世の栄花で話が終わるもの、衆生済度の誓願による成仏ではなく単なる極楽往生を述べるもの、などの差である。菩薩行が近しいものであった時代を経て、追善供養や念仏が重視されることが、仏に成る物語の構造にも影響を与えていったと思われる。他力に頼る俗世の人々にとっては、極楽往生は必ずしも自分が仏になって他の衆生を救うという意味ではない。主人公が捨身して仏となって衆生を救おうとしたことが理解されにくくなったのかもしれない。そうしたことが、後のお伽草子の本地物やそれに類する説話において、誓願を行わずに神仏になったり、苦難の報いが現世の幸せとして描かれたりするようになる理由の一つになるのではないだろうか。

本稿で取り上げた二つの物語も、後代には、大きく変化している。

『大乗毘沙門功徳経』の善生太子説話は、『阿弥陀の本地』となる。『阿弥陀の本地』では、妻の死後に子と再会した父は、子供達に王位を譲り出家し法蔵比丘と名乗る。修行を積んで六十願を誓い、そのうち十二願を妻であった薬師如来に譲る。法蔵比丘は、『無量寿経』などに説かれるとおり、阿弥陀如来が前世で四十八の願を誓ったときの名前である。その法蔵比丘の物語に置き換えているのであるから誓願は記されるが、捨身という形は捨て去っており、王位に就いた子供達が、後に観音・勢至になる理由は、阿弥陀如来の前世の家族だったからということだけになる。

早離速離説話の影響を受けたと考えられるお伽草子には、『月日の本地』がある。この話では、継母によって孤島に捨てられた兄弟を亡母が大鳥となって助け、物語の最後で、兄弟は日と月として顕れる。日と月は、観音菩薩・勢至菩薩に各々関連付けられるものであるが、もとの早離速離説話には、亡母の霊は登場しない。孤島に捨てられた継子を観音が変じた大龍魚が助けるというモチーフであれば、『大乗毘沙門功徳経』（七寺本「愛相行品第四」）にある。孤島に置き去りにされる継子が、男児二名ではなく女児一名であるという違いはあるが、この話との結合を考えて

も良いと思われる。本話は、建保四年書写明尊草案集[17]にも収録されている。草案集では、登場人物の名前が『大乗毘沙門功徳経』と同じであるにも関わらず、子を救うのは、魚類ではなく「鶴」であり、『月日の本地』の「大鳥」に近い。『月日の本地』の「大鳥」は、観音ではなく、母の霊が変じたものである。変容の理由は、各時代がそのような形を求めたためであろうが、このように多くの物語との接点を持つ『大乗毘沙門功徳経』には、さらなる検討が必要と思われる。本経に収録される話の多くが、『法華経』周辺の因縁譚でもあることは既に指摘されているが、登場人物の死が非常に多く記されていること、死ぬ場面の悲しみ、その骨を焼き収めること、誓願すること、供養すること、などの記述が特徴的である。これらは、本稿で検討したような菩薩行や誓願に密接に関わるものであり、仏や菩薩の前世物語における人々の転生の問題として、稿を改めて検討したい。

注

（1）『貴重古典籍叢刊一　赤木文庫本神道集』（角川書店、一九六八年）。

（2）『新潮日本古典全集　今昔物語集二』解説（一九七九年、新潮社）。

（3）牧野和夫氏「『往因類聚抄』との出会い」（『中外日報』一九八八年六月六日）。

（4）所収論文のうち、特に、衣川賢次氏「『大乗毘沙門功徳経』の言語」、牧野和夫氏「七寺蔵『大乗毘沙門功徳経』と「因縁・説話」」（七寺古逸経典研究叢書四、大東出版社、一九九九年）を参照した。

（5）松本隆信氏「中世における本地物の研究（四）―本地物の成立と北野天神縁起―」（『斯道文庫論集』一四、一九七七年。『中世における本地物の研究』所収）

（6）『真福寺善本叢刊第二期一　真福寺古目録集二』（臨川書店、二〇〇五年）収録。落合俊典氏解題。

（7）能島覚氏「理明房興然撰『五十巻鈔』「阿弥陀」所引の経論章疏について」（『宗学院論集』八一、二〇〇九年三月）。

（8）拙稿「金剛寺蔵〈佚名孝養説話集抄〉について」（平成十五～十八年度科研費（代表者落合俊典）研究成果報告書『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』第一分冊、二〇〇七年三月）。

（9）早離・速離説話の類話の比較は、恋田知子氏『仏と女の室町』（笠間書院、二〇〇八年）第七章「偽経・説話・物語草子―岩瀬文庫蔵『釈迦并観音縁起』をめぐって」に詳しい。

（10）三角洋一氏「『源氏物語』と仏教―古注釈それぞれの特色と史的展開―」（『仏教文学』三八、二〇一三年十月）に指摘あり。

（11）黒田彰氏「静嘉堂文庫蔵　孝行集」（『愛知県立大学文学部論集』三九、一九九一年二月）。黒田彰氏「孝行集について」（黒田彰『中世説話の文学史的環境　続』和泉書院、一九九五年）参照。

（12）村上真完氏「Purvayoga（過去の因縁）―大乗経典における過去世物語に関連して―」（『密教文化』一九七一年六月）、杉本卓州氏『菩薩　ジャータカからの探求』（平楽寺書店、一九九三年）参照。

（13）拙稿「金剛寺蔵〈佚名孝養説話集〉翻刻」（『伝承文学研究』五八、二〇〇九年四月）、拙稿「偽経と説話―金剛寺蔵佚名孝養説話集をめぐって―」（『説話文学研究』四四、二〇〇九年七月）

（14）金沢文庫蔵『讃仏乗鈔』（十三世紀成立）第三之七「吉祥」他。

注（13）前掲拙稿「偽経と説話」参照。

（15）注（5）前掲松本氏論文。

（16）『七寺古逸経典研究叢書』四（大東出版社、一九九九年）の訓読文による。

（17）岡見正雄氏「説教と説話―建保四年写明尊草案集中の一説話の釈文―」（『国語国文』二六―八、一九五七年八月）

付記　本稿は、ＪＳＰＳ科学研究費補助金（23720124）による研究成果の一部である。

（みのうら・なおみ　本学大学院助教）